

研究ノート 交錯する民俗学と教育学

—学校教育における伝統芸能の創出をめぐる—

小国 喜弘

柳田国男は、民俗学を創始した当初、「民俗学」という用語を使うことを忌避して「民間伝承論」を用い、アカデミズムとして制度化するのではなく、むしろ「野の学問」たることを矜持としていた。そもそも民俗学にとって教育学は関わりの深い学問領域だった。

1935年民間伝承の会の設立当時、「野の学問」としての民俗学を支えたのは小学校教師であったし、よく知られているように柳田国男の民間伝承論は学校教育への関心が強かった。「国民総体の幸福」を願い、共同体の再生産と文化の世代間継承を重要な主題とする点においても二つの学問は共通性を備えていた。つけ加えれば、民俗学も教育学も国民国家を前提として発展してきた学問でもあった。にもかかわらず野の学問からアカデミズムへと民俗学が変貌を遂げた1940年代以降、民俗学と教育学との間に大きな隔たりが生まれることになったのではなかろうか。

アカデミズムとしての民俗学は、学問としての厳密さ・資料操作法の客観性を重んじる中で、子どもの教育環境をトータルに捉え、その改善の方途を探ろうとすることに禁欲的になっていったように思われる。同じような状況は戦後の教育学の側にもあった。人文社会科学の中で後進の学として出発し、戦後、大学の中に正式な学問の場を獲得することになった教育学は、教育学の固有の目的や方法は何かという、今日からすれば不毛ともいえる問いに悩まされることになった。子どもの発達法則の解明を教育学の固有性と強いて見なそうとする中で、教育学者たちは、子ども個々人に焦点を当てるか、その子どもが育つ社会としてのネイション「日本」に焦点を当てるかのどちらかになりがちだっ

た。私たち教育学者は、子ども達が多様なコミュニティの中で育っていることに気づいていても、それを理論的な課題として解明の対象に据えようとはしてこなかった。結果としてアカデミズムとしての教育学は、その学問の固有性を保持し、研究方法の客観性を重視するあまり、子どもの教育環境を様々なコミュニティとの緊張関係において捉え、子どもの育ちの改善の方途を探ろうとすることに對して禁欲的であったのだ。だとしたらアカデミズムへの途を辿るなかで、民俗学も教育学もある種の「実践性」を喪ってきたともいえるだろう。

ところで近年、地域における民俗芸能の伝承を考えたとき、学校教育は重要な役割を果たす存在になりつつある。保存会などが学校で芸能を教える動きが活発化しているからだ。

ただし学校での取り組みは、単に学区にある芸能を子ども達に忠実に継承するという試みに止まらない複雑な様相を帯びてもいる。教師たちはしばしばその地域に伝承されてはいない芸能を他地方から学び、その芸能を運動会や文化祭向きに大胆に再構成して子ども達に伝えようとしているからだ。そのような試みは必ずしも学校内部だけに止まっているわけではない。時には学校で子どもたちが学んだ他地域の芸能が学区内での祭で上演され、郷土の芸能として新たに根付くことすらある。付け加えれば、文部科学省の伝統文化教育推進事業など、民俗芸能の教育を、ナショナルな統合に改めて利用しようとする動きも活発化しているのである。

本稿で取り上げるのは、民間教育研究団体として教師たちによって結成された東京民族舞踊教育研究会の取り組みである。民族舞踊教育研究会は、1968年に体育の舞踊教育が西洋舞踊ばかりであることに不満を抱く教師たちによって結成された民間教育団体である。研究会に集う教師たちは、北海道のアイヌ舞踊から沖縄のエイサーにいたるまで、各地の舞踊を現地に直接出かけて行って伝承者から教えてもらい、学校用の舞踊に再構成して実践にかけている。以下で中心的に取り上げるのは、2005年8月、東京民族舞踊教育研究会の主催で開催された第二回荒馬サミットでの伝承風景である。同研究会では1990年代より「荒馬」という青森県を中心に伝承されてきた舞踊を勤務校の子どもたちに運動会や学芸会などで躍らせることに取り組んできた。

本稿で取り上げる「荒馬サミット」は、青森県今別町で開催されるねぶた祭りにあわせて地元の保存会の人たちから直接「荒馬」の踊り方を学び、実際の祭りで「荒馬」を踊るといふ、いわば祭り参加型の講習会であった。当日は幼稚園から大学の教師と東京の中学生合計70名あまりが参加した。

その継承の過程から浮かび上がってくるものは、学校教育が民俗芸能の伝承に取り組むことが、ナショナル・アイデンティティの強化へと収斂してしまう危険と同時に、民俗芸能が本来持っていた公共的性格を再び取り戻し、多元的なアイデンティティの養成を子どもに促す可能性であろう。本稿はここに民俗学と教育学が改めて交錯する可能性を見たいと思う。

以下、第一節において第二回荒馬サミットの様子を概観しよう。その上で第二節以降において、今別の民俗芸能「荒馬」を今別以外の地域の学校が伝承する中で何が起きているかを検討してみたい。

第一節 芸能を公開すること

(1) 荒馬サミット

青森県東津軽郡今別町は、津軽半島の北端の中央部に位置し、津軽海峡に面した海岸沿いの町であり、人口約4000名（2006年1月現在）の過疎の町である。「荒馬」という芸能は、男性の馬役と女性の手綱とりが対となり、さらに太刀振り・踊り子・囃子方・ネプタ灯籠が加わって隊列を組んで町内を行進する行事である。田植えが終わった後に、農民が加護と感謝のために催したサナブリの行事であったといわれている。

郷土史家の推測によれば荒馬の踊りが始まったのは16世紀ころで、ネプタ祭りが開始されたのが18世紀頃からのことであった。今別の荒馬が知られるようになったのは1961・62年に青森県文化財保護協会主催の青森県無形文化財大会に出場し、さらに1962年には劇団わらび座が郷土芸能として劇化し、日本・中国で公演したことから全国に知られることになった。1980年には今別町指定文化財に、2003年には青森県無形民俗文化財に指定されている。

荒馬行事が一番盛んに催されたのは1980年代であった。1980年の統計調査によれば当時の人口は約7000名であり、30歳以下の人口は約3200名であった。対

して2000年になると人口が約4100名、30歳以下人口は約920名と激減している。今別町内で無形文化財に指定されている荒馬は今別荒馬・大川平荒馬・二股荒馬の三つであるが、担い手になり得る青少年少女が減少しているだけでなく、地域住民による行事への関心も低下しているという事情があり、今別荒馬に即していえば最盛期には荒馬だけで数十名、運行の総勢100名ほどであったのが、現在では30名近くに減っている。

そのような状況において1980年代末から90年代にかけて荒馬や笛・太鼓の習得に今別を訪れる県外の大学生や教師・保母が増えていく。東京民族舞踊研究会の教師たちが荒馬を学ぶために今別に直接訪れるようになったのは1980年頃からのことであった。創設時からのメンバーの一人である園田洋一（和光小学校）によれば、民俗芸能は地域の口伝による伝承が中心で、よそ者が教えてもらおうと思っても困難で、まず保存会の人たちとの信頼関係を築くことが大変だったという。

過疎と高齢化に悩み、祭りの担い手不足に悩む保存会にとっても、毎年通ってくる熱心な教師たちの存在は次第に頼もしい助っ人となったこともあって、次第に祭りに教師たちが参加しつつ踊りを教えてもらうという形態が広がっていった。「荒馬サミット」は、このような自然発生的に広がっていった教師たちへの伝授を講習会として組織しようとする取組みである。第一回荒馬サミットは2004年6月12日・13日に東京都中野養護学校で100名近い教師たちを集めて開催された。一日目に全国の教師たちを集めて荒馬の踊り方や笛や太鼓などのお囃子の手ほどきを地元保存会の人たちから受け、二日目には合同運行と称して中野商店街を練り歩いた。

筆者が訪れた第二回荒馬サミットははじめての現地開催による講習会であり、さらにねぶた祭り期間中に開催され、学んだ踊りを地元の実際の祭り本番に参加して披露するという意味でも新しい試みだった。

第二回荒馬サミットに集まったのは保育園の保母、幼稚園から高校の教師、さらに学校で荒馬を学んでいる東京の小・中学生ら、総勢約70名である。午前中の講習会では、馬役、手綱取り役、お囃子に分かれて、それぞれ地元保存会の人たちから講習を受けた。開始時には今別町の助役・教育長が挨拶をし、町

としての期待の大きさもうかがわせる。午後には地元郷土史家による講演があり、夕方からねぶた運行への参加が行われた。

これら祭りの上演を通して、「祭り」とは何かが改めて問い直される場にわれわれは際会している。

(2) 複綜的な共同性と空間を超えた伝承

従来、特に農村部における祭りの運営母体としては、神社の氏子を中心とした地縁による共同体の存在が強調されてきた。しかし、今別のねぶた祭りにおいて成立していた共同性は複雑であり、また芸能の伝承が地域共同体を超えて行われる点に特徴がある。

そもそも今別荒馬の運行に参加したのは総勢約100名であったが、今別在住者はその内約30名ほどであり、残りは他県から来た教師と生徒たちであった。祭り参加者の過半は、非今別在住者なのである。彼らは事前に荒馬の踊りを習得していた者もいたが、多くはサミットで習ったばかりの「伝承者」たちであった。

教師たちは研究会で日ごろから活動し、祭りと踊りが好きで自費で参加している者もいたが、荒馬の踊りを習得することを目的として、学校から出張費を支給されて来ている公立・私立学校の教師も存在する。これら教師たちは数人のグループで参加しており、場所を移動するときや講習を受けるときだけでなく、実際にねぶたが町内を運行するに際しても、自然とグループごとに固まって踊っていた。さらにいえば服装も必ずしも統一されていない。サミットの主催者は、浴衣での参加をあらかじめ推奨し、さらに祭りの衣装を購入することができる地元の洋品店も紹介していた。にもかかわらず、Tシャツ姿、ジャージ姿の参加者も少なくなかった。

従来、民俗学では農村の祭は見る者と見られる者とが一体であり、それに対して都市の祭礼では見る者と見られる者との分離があると捉えてきた。しかし、ここで見られるのは、祭り行列を見ているのは地域の人たちが中心であり、彼等は祭りを開催する氏子の一人でもあるという意味では主催者側に入っている。そして本来、見物にまわるべきよそ者の教師達が祭り行列に参加しているとい

う意味では「見られる者」の側に入りつつ、踊りながら、地元保存会の踊り方を実地に見学しているという意味において「見る者」の側に入っている。しかもそのよそ者の教師たちはそれぞれの職場に帰ると伝承者として子ども達に荒馬を教える立場に立つのであり、その点でいえば荒馬の行列で踊る個々の教師たちの背後には、職場の教師・生徒らの共同体が潜んでもいる。

興味深いのは、これら「よそ者」が地元保存会の人たちから、今別の荒馬の重要な継承者と見なされている点である。子どもが減少しているだけでなく、その子どもたちも青森市内の高校に進学し、多くは青森市または東京へと就職していき、さらには今別に住む数少ない若者たちの中にも祭りに関心を寄せない人がいる状況の中で、「荒馬」に関心を寄せ、さらに祭りに助っ人として登場する他地域の教師やその教え子たちの存在は、数少ない希望となっているからである。サミット中の保存会の人々の挨拶の中には「今別の荒馬は滅びるかもしれませんが、皆さんを通して今別の荒馬が踊り続けられることを期待しています」という発言も見られた。

またサミットで午後講演を行った青森県文化財保護協会の佐々木文武は「今別の若者より皆さんの方が伝統芸能を継承する心を持っているかもしれません」と述べて講演を締めくくった。芸能の伝承の範囲を単に今別という地域共同体の外部に開いたというだけではなく、外部に開かないことには芸能を継承し得ない、という状況が存在している。しかも今別荒馬保存会の人たちは、しばしば東京などで開催される研究会にかけつけ、一緒に踊る中で荒馬を指導している。かくして芸能の伝承を通して、地域を越えた幾つもの踊り仲間としての共同性が形成されている。

第二節 「民族舞踊」として継承すること

(1) 下からのナショナリズム

東京民族舞踊教育研究会が荒馬をはじめて教材化したのは1975年12月のことであり、そのとき荒馬を教えてくれたのはわらび座であった。今別荒馬保存会をはじめて訪ねたのは1980年8月のことであり、1987年に教師20人で今別に行き、ねぶた祭に参加しながら荒馬の踊り方を学んだ。1988年には4月と9月に

今別青年団を東京に招いての講習会を開催し、4月には240名、9月には400名の参加者を得た。またこの年8月の今別ねぶた祭への教師の参加者も50名に上っている。以上のような講習会を通じて各職場に荒馬の踊り方を持ち帰る教師たちにとって、荒馬は「民族舞踊」の一つとして捉えられている。本節で考えてみたいのは、特定の地域の芸能を「民族舞踊」と見なすことから生じる微妙な問題群である。民族舞踊教育の提唱者の一人中森孜郎は次のように述べる。

全国各地に伝えられる、民衆の生活に根ざして生まれた舞踊は、正しくは民俗舞踊、もしくは郷土舞踊と呼ぶべきものである。しかし、私たちはあえて民族舞踊を選び、掲げた。それには、すでにわらび座が民族歌舞団と名乗って、日本の民族歌舞の再創造をめざしていたこともあったが、それとともに、各地のすぐれた郷土舞踊を、その地域だけのものとして保守的閉鎖的に伝えていくのではなく、日本の子どもたちの共有の文化にし、彼らの成長の糧にしていきたいという、壮大な希望と目標を抱いての出発という意味合いが込められていた*1。

各地で伝承されている芸能を「民俗舞踊」「郷土舞踊」と呼ばず「民族舞踊」として継承しようとする背景には、「日本の子どもたち」に「日本の踊りを」踊らせたいというナショナリズムに由来する。「国民教育」の一翼を担う教育実践であることを意識しつつも、その際当事者たちに強く意識されていたのは、国家による上からのナショナリズムへの対抗を下からのナショナリズムによって徹底することであった。

東京民族舞踊研究会の村瀬幸浩によれば『明治百年祭』『万国博』などの国家的行事に『民族』の踊りをひっぱり出し“ディスカバー・ジャパン”的物珍しさをくすぐりながらこれを反動的に利用しようという潮流」と、「一九五〇年の文工隊『海つばめ』（後のわらび座）以来、民主運動、平和運動とかかわりながら、民族文化の発展をめざして精力的に努力を積み重ねているもの」とを対置している。その上で、村瀬は後者、すなわち支配者に対する抵抗の文化遺産という側面を重視し、取り組みに共通する理念として「まず教師自身が日

本の踊りの楽しさや、ねうちを体験していることであり、そうした文化遺産を生徒の前に示し、これと格闘させ、意識変革をせまろうとしていること」にあると述べる*²。村瀬はおかげまいりや阿波踊りなどを取り上げながら、「日本人の踊りは、このように、狂気への逸脱という面を部分的にはらみながら、しかし民主と解放を求めるたたかいや運動と結びついて、つくられ、受け継がれ、発展してきた」ことを強調し、生徒たちに「多くの芸能や舞踊がその歴史の中に持っていた民主と開放を求める民衆の期待や意気」に改めて触れさせることを民族舞踊の教育課題に据えていたのである*³。

(2) 踊る喜びの共有と平等な組織

その際、特徴的なのは、信仰の問題を芸能の継承から極力排除すると共に、身体を動かして踊る喜びを強調したことであろう。村瀬によれば、そもそも「日本の踊りのもつ信仰的要素——その動きの約束ごと——にこだわらないということ」を基本としていた*⁴。村瀬によれば舞踊とは「超人間的自然にたいする祈りや呪術、狩猟や耕作に対する予祝、人間集団の感情統一、意志の確認など」の機能において「人間社会にとって必要な文化としてしだいに形づくられ、継承されていった」とする立場から、「身体的快感——リズムにしたがった一連の動きがもたらす楽しさ、これが不可欠の前提になるのではないか」と述べている*⁵。

「荒馬」においても、踊ることの楽しさを子どもに味あわせることがまず重視されている。和光小学校で早くから荒馬を教材化した平野正美は荒馬の魅力について次のように述べている。

二つとびや四つとびを、構成など気にせず自由に楽しんでねることができる、一人で突進する時の、あの気もちよさを体で感じ取るとともに、グループで輪をつくり、グルグル、グルグルうずをまいて、だんだんと体の勢が増し、ついにはその輪が切れて、「むれ」での突進へとうっついていく時の、集団でなければ味わうことのできない突進の楽しさを感じると、子ども達にとっては、踊りを踊るというよりも、踊りを遊ぶと言った方が

いいような、そんな時間をたくさんつくってきたのでした*⁶。

特定の土地での芸能が全く別の地域の学校で教材化される際に、宗教性が排除されて、集団で踊ることの楽しさや魅力が強調されるのと共に、参加者の平等性が新たに強調される点も特徴である。通常、民俗儀礼には、年齢・性別・家柄によって果たし得る役割が自ずと決まっている。それに対して学校で行う舞踊は学年によって演し物が変わるだけで、極力子ども本人の希望によって決められるのが原則である。「荒馬」の場合、今別で上演されるときは馬役が男性、手綱取りが女性と決まっているが、平野正美が学校で実践したときには手綱取りを男性児童が演じたようである*⁷。和光小学校の園田洋一からの聞き取りによれば近年は子ども達の希望により手綱取りを作らず全員が馬役を演じているようだ。

付け加えれば、このような学校教育の規範は今別での荒馬行事にも影響を与えている。荒馬を習いに来た教師たちには女性が多く、その女性たちも荒馬として当日の祭りで踊ることになるし、そればかりでなく、そのような姿を見ている地元の女子児童もまた手綱取りではなく荒馬として祭礼に参加することを好む者も出現しているからである。

(3) 「日本文化」の継承を媒介としてつながり直すこと

今別荒馬をはじめとして各地の舞踊を学ぶことを教師たちにおいて動機づけているのは「日本の舞踊文化遺産を継承・発展させていく」ことである*⁸。興味深いのは、ナショナリズムを媒介とした教育実践が固有名をもった地域と地域、人と人との出会いを生み出していることだろう。1980年の今別で荒馬を学んだのが研究会としてはじめての現地取材であった。その体験を古矢比佐子は次のように振り返る。

この取材旅行で、特に感じたのは、私たちに手とり足とり踊りを教えてくれた保存会の人々の踊りに踊りに対する誇り、情熱である。「荒馬は、他の土地にもあるけど、今別のが日本一。」「仕事で青森へ行っても、ね

ぶたの時には必ず、今別へ帰ってくる」という、今別の青年たちの話や、奴踊りの最初の捨て足がなかなかできないわたしたちに、「そうじゃない、そうじゃない」と、できるまで、ついて教えてくれた78才のおばあちゃんの存在は、踊りを大事にして生きていることを、目の前で見せてくれたように思う*9。

このような体験を通して、研究会の教師たちは毎年夏休みに様々な地方に出かけて地元の人たちとの交流の中で踊りを学んできた。1981年には岩手県小本に中野七頭舞を取材し、1984年に宮城・寺崎はね娘踊りと沖縄・竹富島取材。1985年に奥三河、花祭り取材、1987年に北海道二風谷取材、と活動を続けている。そのような取り組みを通して、わらび座と現地での踊りとの違いに改めて気づかされていったとした上で、古矢は「地元で踊りを習う意義」を「わたしたちが日本の踊りとして民舞をとりあげる場合、やはり地元の踊りにふれることは、必要なことなのだと思う」「民舞を文化の問題としてとらえたとき、その踊りがどのように生まれ、現在、地元の人々によって、どのように踊られているのか、踊っている人々は、どんな思いをこめて踊っているのかを知りたいと思う。また、民俗芸能や郷土芸能というものと、わたしたちの生活が離れていきつつある現代の生活の中で、日本の踊りのもつ意味は何なのかを問い続ける必要がある」「踊り継ぐということや、その踊りが地域で一つの文化としてはっきり位置づいているということでは、教師と地域とが一体になってすすめているということがよくわかる」ので「ただ民舞と教育ということだけではなく、地域と学校、地域で果す教師や学校の役割りということについてまで考える視点を与えられるように思う」とまとめている。そして「東京に帰ってくるたびに、もう一つふるさとができたように思えた」と古矢は記し、現地の人とつながる喜びを記した*10。民族舞踊教育研究会の別のメンバーは、現地の人たちとつながる意義を次のように記している。「ボクの勝手な思い込みかもしれませんが、踊りを通して地元の人と結ばれているという気がするのです。あの土地にはあの人たちがいると思うと、励まされたり、幸せな気分になることができるのです。そういう意味でも、一度はその土地に行って、そこで踊りを

習いたいと思うのです」。^{*11}

さらに研究会に集う教師たちは1985年から89年にかけて計6回にわたって「みちの国座」と題した公演を行っている。第6回は「今別のみなさんありがとう公演」と題して研究会のメンバーが踊ると共に、地元の子ども会や保存会が出演した他、岩手県の中野七頭舞保存会の人たちが加わるなど、別の地域の芸能保存者同士を結ぶ活動も行っている^{*12}。

また東京の私立和光小学校では生徒が民族舞踊を鶴川団地で踊り、団地の人々と交流したり^{*13}、山形県山形市作谷沢小学校ではわらび座から学んだ「みかぐら」が地区民運動会で踊るだけでなく豊作祈願の春祭りでも村の郷土芸能として踊るなど、踊りを通して様々な縁が広がっている。

研究会に参加している教師の一人は、民族舞踊を学ぶ楽しさを次のようにまとめている。

日本の踊りには、独特の動きとリズムがある。その動きとリズムの源にはそれらを生み出した長い日本人の生活の歴史がある。ただ、東京の学校で、小本の七頭舞を地元で踊っているように、そのまま踊らせたいと考えても、やはりできないことである。明らかに自然条件も異り、現在の生活の場が違うのだから、それでも、わたしたち教師は、動きとリズムだけをとりあげて教えれば良いということではないだろう。日本の踊りがもつ文化としての価値をふまえ、それを子どもたちに伝えるとりくみが必要であることだろう。

体を精いっぱい動かして踊るとき、一人で踊るよりもみんなで踊ることの方が楽しい。踊ることで心うちとけ、共有できるものが生まれる。そういう人と人とのつながりは、学校の中でも、家庭でも、地域でも、人間が集団で生活するときにはいつも欲しているものである^{*14}。

舞踊や芸能を継承することは、通常それを伝承する母体となる特定の共同体の中に参入していく行為として理解されているが、ここでは、様々な伝承母体への参入を試みながらも、そこで得た技能や見識が「日本の踊り」の再生と継

承という、個々の伝承母体が課題にしている内容よりも抽象度の高い目標を掲げることにより、複数の伝承母体へと一定程度参入すると同時にそれらとの一定の距離を保とうとしながら学習が行われていたのである。

終わりに ー民俗行事の真正性と地域性をめぐって

以上のような「民族舞踊」の再生と継承は、正統的な民俗学から見れば、異端的な取り組みであろう。

筆者が、日本民俗学会のシンポジウムにおいてこの民俗儀礼を発表したとき、多くの反応は、この行事は民俗学的な見地からして、好ましくない伝承形態になっているというものであった。しかし果たしてそうなのだろうか。すでに都市部の民俗行事の多くが非住民の参加によって継承が可能になっている現実がある。また荒馬行事の場合、今別町の住民からするならば、すでに述べたように、他県から来る教師にしか文化継承の希望を見出すことが出来ない現状がある。付け加えれば、今別の荒馬は青森県無形文化財にも指定されているのであり、単に例外的事例とみなすのは困難なように思われる。

さらに、本報告が取り上げた、いわば「異端」的文化継承は、正統的と民俗学が見なしてきた文化伝承の要素と実はいくつかの点で共通しているのようにも思われる。すでに柳田国男が『日本の祭り』において指摘しているように、祭祀儀礼自体、常に時代と共に変遷しているのであり、また本田安次が述べているように、多くは他の地域から伝播し、時に海外から海を越えて移入されている^{*15}。民俗芸能が、その土地で生まれたものではなく、様々な地で上演されるなかで変化しつつもたらされ、そしてある土地に根付いてからも、その土地土地において世代間継承されていく間において、時代の波を受け、絶えず変化している。荒馬行事においても、女性が荒馬役になるなど近年における変化があり、そのような時代に応じた変化を地元保存会の人たちも承認していた。

だとしたならば、改めて疑うべきは、文化を「真正」で「不変」なるものとして捉えようとする意識そのものであろう。「真正」で「不変」なる民俗伝承など存在せず、すべての民俗伝承は異種混淆的な文化要素の複合であり、さらにいえば前近代そのままの民俗など存在しないことを前提にするならば^{*16},

東京民族舞踊教育研究会における伝承行為を非正統として排除することは難しいだろう。むしろそこには一見非正統だからこそ見えてくる要素があると見なすべきなのではないだろうか。

ここでは、三点にわたって問題提起を行って、今後の研究課題としたい。

第一に、民族舞踊の研究会の教師たちの民俗記述が実際に踊りを習う時にわき起こる内面的感情に焦点をあてていることに注目したい。かつて講習に参加した東京都の小学校教師は次のように祭礼に参加した感想を記している。

佐藤保存会長さんが、4つとびのところで私たちのおどりを見て、「ちがう、ちがう、みなさんのは、はねてるけれど、1, 2, 3, 4で、足はこうですよ。」とってくださいました。……

行進、それがまたうれしい！保存会の人のお太鼓だと、自然に胸がぴんとはってしまいます。おどっている人、みんなもそうでした。馬のおひろめみたいです。ふっている馬のしっぽがゆっさゆっさしています。

だんだん、太鼓にはりがでてきて、おどりの太鼓になるともう、じっとしてられません。思わず、しまなかさんと足拍子を(?)一緒にしてしまいます。そのうち、まちきれなくなってくるのです*17。

従来の民俗学記述が、どちらかといえば信仰との関係において解釈することを中心としてきたのだとしたら*18、それに対して行為者として文化継承にかかわるとき、改めて焦点化されるのは、身体の具体的な動かし方であり、実際に踊ってみたときに感じる感情の動き、特にうれしさの感情であろう。民俗の伝承という主題においてそこで生じていることを研究する、あるいはその研究を通して現実に起こっている伝承を援助しようとするのであるとしたならば、このような些細ともみえる具体的な身体の動きの記録と共にその踊る過程での感情の問題にも焦点を当てる必要が生じるのではないだろうか。そのためには、従来の研究手法において支配的だった、出来るだけ客観的な形での観察記録に加えて、自ら謡って踊りながら記録する、「謡って踊る民俗学研究」ともいう

べき、アクション・リサーチのスタイルの持つ積極性を今一度、考えてみるべきなのかもしれない。それは同時に「踊って踊る教育学研究」が求められていることでもある。

第二に、正統的周辺参加では、真正な単一の共同体が一つ措定され、そこへの参入の過程として学習が理論化されてきた。しかし現実には、真正な共同体など存在しないし、人は複数の共同体を渡り歩きながら、あるいは同時に複数の共同体にかかわりながら、そのなかで一つの共同体から別の共同体に知識や技能を伝え、共同体の革新をもうながしながら、自ら成長を遂げていった。それは、東京民族舞踊研究会のメンバーが今別や大森といった複数の保存会に出入りしながら、自らの参加する研究会の見識を高めていくと同時に、それぞれの職場に踊りの技術を伝え、そして職場の共同性を再編している。そして保存会の人たちは、教師たちとの出会いのなかで、みずからの芸能の価値を見直すと共に、新たなスタイルと出会い（たとえば女性が荒馬を踊るなど）、自らの舞踊儀礼自体を変更している。このような複数の共同性のなかでの往来の中で人が学んでいることをどのように理論化するのが、改めて問われている課題であろう。これも、共同体の中での人々の成長の過程を描き出そうとする民俗学・教育学にとって共通する問題である。

第三に、改めてナショナリズムの問題がある。新自由主義によるナショナリズムの再編成の中で郷土芸能を「日本文化」として学校教育において継承する取り組みが奨励されている。郷土芸能の政治利用は、第二次世界大戦における国民学校令下の小学校でも盛んに見られた^{*19}。今別の踊りを学び、それを全く別の地域の学校で子どもに教えるとき、それが今別の踊りを模倣しているのでも、また「日本の踊り」を教えているのでもなく、様々な舞踊文化の遺産に学びながらも、いま・ここにある子ども達の踊りをつくり、そしてその共同性を組織しているのであることを、いかなる理論的な言葉において語るのか、それもまた我々につきつけられた課題であるように思われる。

追記：本稿は、平成17年度日本民俗学会大会シンポジウム「野の学問と民俗学」における報告に加筆訂正を加えたものである。なお、日本学術振興会基

盤研究Cの助成の成果の一部でもあることを併記しておきたい。

- * 1 中森孜郎『日本の子どもに日本の踊りを』, 大修館書店, 1990年。
- * 2 村瀬幸浩編著『体育の授業 日本の踊り』, 民衆社, 1975年, 93-94頁。
- * 3 村瀬前掲書93-94頁。
- * 4 村瀬前掲書32頁。
- * 5 村瀬前掲書22頁。
- * 6 平野正美「あらうまするとからだがかんてんようになってくるよー2年生の荒馬踊りー」『民族舞踊教育研究』9号, 1989年, 56-57頁。
- * 7 平野正美「『荒馬』分科会ではっきりしてきたこと」『民族舞踊教育研究』9号, 95頁。
- * 8 村瀬前掲『体育の授業』39頁。
- * 9 古矢比佐子「現地取材による発見, 再発見ー大森『みかぐら』ー津軽『荒馬』, 『奴踊り』ー小本『中野七頭舞』」『民族舞踊教育研究』第11号, 1992年, 7-8頁。
- *10 古矢前掲論文11頁。
- *11 菊池和芳「今別と『荒馬』」『民族舞踊教育研究』第9号, 1989年, 149頁。
- *12 田川理恵「民族舞踊教材化研究の課題をさぐるー東京民族舞踊教育研究会の研究史を中心にー」『民族舞踊教育研究』第10号, 1991年, 25頁。
- *13 <http://www.wako.ed.jp/s/newsevent/now/2005/now0930.htm>
- *14 古矢比佐子「現地取材による発見, 再発見」『民族舞踊教育研究』第一一, 1992年。
- *15 本田安次『民俗芸能』, 社会思想研究会出版部, 1962年。
- *16 例えば, 山下晋司「民俗芸能を伝承する論理ー松戸市和名ヶ谷の三匹獅子舞」『松戸市立博物館調査報告書1』, 1994年。
- *17 倉部弘美「今, わたしにとって, とく別なところ……今別」『民族舞踊教育研究』9号, 1989年。
- *18 上野誠「<神>という自動説明ボタンを封印せよ」『正しい民俗芸能研究』0号, 1991年12月。
- *19 金子直樹「勝ち抜く行事: 翼賛文化運動における祭礼行事・民俗芸能の『活用』」『郷土』研究会編『郷土: 表象と実践』, 嵯峨野書院, 2003。